

「瑠璃も玻璃も照らせば光る」

市東 さやか

登場人物

木村 ひかる(17) 高校二年

立石 瑠璃(17) 高校二年・演劇部

吉田 美沙(17) 高校二年・演劇部

木村 康一(52) ひかるの父

木村 里絵(48) ひかるの母

三隅 修二(43) 医師

中野 敦子(38) 看護師

峯田 教師

部員1

部員2

○木村家・リビング（朝）

散らかり気味のリビング。

ソファの上には山積みの洗濯物、机の上には溜まった新聞、マグカップなどが置きっぱなし。

ひかる「お父さーん、食べ終わったー？」

キッチンから父親を呼ぶ木村ひかる

（17）、制服姿でウインナーを焼いている。

点けっぱなしのテレビから、朝のニュースが流れる。

康一「うん。まだ」

新聞に夢中になっていた木村康一（5

2）、続きを食べ始める。

ひかる「もー、私もう行くよ」

ひかる、ウインナーを二つのお弁当箱に詰めていく。

隣にはお弁当の余りのおかずが載った皿。

ひかる、余ったウインナーを皿にのせ、

康一を見ると、また新聞に夢中。

ひかる「おとうさん」

康一「うん」

と、新聞を見ながら食べ始める。

ひかる、大きい方のお弁当箱を包み、

康一の前に置いて、

ひかる「はい、どうぞ」

康一「うん」

ひかる「食べ終わったら、お皿シンクに入れ

といてね」

康一「うん」

ひかる「じゃ、行ってきます」

康一「うん。行ってらっしゃい」

ひかる、リビングを出て行く。

康一、また新聞に夢中で箸が止まる。

○同・里絵の部屋（朝）

カーテンを閉め切った暗い部屋。

ひかる、ドアから顔を覗かせて、

ひかる「お母さん、起きてる？」

布団に入っていた木村里絵（４８）、

寝返りをうつ。

里絵「うーん……」

ひかる「きつい？」

里絵「……頑張って起きるね」

ひかる「頑張らなくていいよ。冷蔵庫におかずあるから、それだけ」

里絵「ごめんね」

ひかる「今日も安定の、お弁当の余りものです」

里絵「……やったあ」

と、無理に笑顔を作る。

ひかる「じゃあ、行ってきます」

里絵「行ってらっしゃい」

里絵、布団にもぐり直して寝返りをうつ。

○同・外観（朝）

いたって普通の一軒家。

家から出てきたひかる、スマホで時間

を確認し、

ひかる「やばっ、バス来ちゃうじゃん」
と、小走りで去っていく。

○山ヶ丘女子高・全景（朝）

次々と通学してくる生徒たち。

○同・教室（朝）

女子生徒の笑い声で賑やかな教室。

ひかる、自分の席にカバンを置くと、

吉田美沙（17）が寄ってくる。

美沙「おはよー」

ひかる「おはよ」

美沙「遅かったじゃん」

ひかる「お父さんの朝ご飯待ち」

美沙「マジか」

ひかる「待ちきれなくて置いてきた」

美沙「正解」

ひかる「ご飯と新聞、同時にできないタイプの
の人なのかも」

美沙「そんなタイプある？」

ひかる「1限なんだっけ？」

美沙「なんだろ？ 国語？」

ひかる「ごめん、聞く人間違えた」

美沙「私、先生の顔見ながら教科書の準備するタイプ」

ひかる「……そんなタイプある？」

美沙、改まって、

美沙「あのさ、ひかる」

ひかる「ん？」

美沙「ちよつと、お願いがあるんですが」

只事ではない様子の美沙に、ひかるも

思わず真剣な顔で、

ひかる「なんででしょうか」

美沙「照明、やってくれない？」

ひかる「……証明？ 数学？」

美沙、首を横に振る。

ひかる、少し考え込んで、

ひかる「ああ、部活？」

美沙「そう！」

美沙、深刻そうに語り始める。

美沙「ご存じの通り、うちの演劇部はとにかく人がいません」

ひかる「はい」

美沙「なので役者も裏方も関係なく、できる人ができることをやるシステムです」

ひかる「そうなんだ」

美沙「だけど今度の定期公演会、どうしても人が足りなくて」

ひかる「大変じゃん」

美沙「だから、照明さんを探しています！」

と、頭を下げる。

ひかる「でも、やったことないよ」

美沙「それは大丈夫！ちゃんと教えるから」

ひかる「うーん……」

美沙、申し訳なさそうに、

美沙「……家のこと大変だね？」

ひかる「いや、家のことは……うん」

美沙「誰に声かけても断られて」

ひかる「うん」

美沙「あと一人だけ、なんとか見つけないと」

ひかる「うん」

美沙「公演できなくなっちゃうよ……」

ひかる「うん。じゃあ、やるよ」

美沙、一瞬固まり、机を両手で叩いて、

美沙「えっ、今なんて言った！？」

ひかる「え？ やるよって、言ったよね？」

美沙「言った！ えっ、ウソ？ やってくれ

るの？」

ひかる「だって困ってるんでしょ？」

美沙「人生最大の困難って感じ」

ひかる、思わず笑って、

ひかる「大事件じゃん。私でよければだけど」

美沙「ひかるで良い！ いやひかるが良い！

忙しいのにごめんね……なんなら本番だけ

来てくれたらそれでいいから！」

ひかる「それは流石に無理でしょ」

美沙「大丈夫。照明とか音響とか、当日だけ

なんとか頼み込んでやってもらうの、演劇

部あるあるだから」

ひかる「え、そんな感じなの？」

美沙「人がいないからねー」

と、気楽に言っただけ。

ひかる「流石だね……」

美沙「うちは難しいことはしないから、絶対

大丈夫」

ひかる「それは助かるけど」

美沙「ああもう嬉しすぎる！　ありがとう！」

ひかる「あつ、言っとくけど、舞台には出な

いよ？　セリフ覚えられないから」

美沙「それは保証します！」

ひかる「最近、お母さんも調子いいし」

美沙「お母さんありがとう……！　ひかる大

好き！　神様だー！」

と、ひかるに抱きつく。

ひかる「大袈裟だよー」

峯田、教室に入ってくる。

自分の席に戻っていく生徒たち。

美沙「じゃあ放課後さ、とりあえず一緒に部

室行こっ」

ひかる「うん」

峯田「おい吉田、さっさと座れー」

美沙「はい！」

と、峯田に向かって返事をして、

美沙「（小声で）じゃあね」

と、ひかるに手を振りながら席に戻る。

ひかる、小さく手を振り返す。

○木村家・リビング

里絵、真っ暗なテレビ画面を見つめ、

ぼんやりとソファに座っている。

○山ヶ丘女子高・教室

峯田、授業をしている。

ひかる、窓側の席から、ぼんやりと外を眺める。

ひかるM「本当は、お母さんのことが気になるけど、美沙の頼みだし」

と、ふと斜め前に視線を向けると、ちようど振り返った美沙と目が合う。

小さく微笑み合う、ひかると美沙。

ひかるM「照明ぐらいだったら、私にもできるかなって」

峯田「こら吉田、よそ見すんな」

美沙「ごめんなさい」

峯田に注意され、姿勢を正す美沙。

ひかる、再び外を眺めて、

ひかるM「……ちよつとぐらい、青春みたいなこと、してみたかったし」

○同・部室（夕）

7、8名程度の部員たち、だらだらと

雑談中。

美沙とひかる、入室。

美沙「みんなー、照明さん決まったよ！」

部員たち、雑談をやめて、

部員1「その子？」

美沙「うん。同じクラスのひかる」

ひかる、緊張の面持ちで小さくお辞儀する。

ひかる「よろしくお願ひします。初心者なん
で、迷惑かけるかもしれないけど。頑張り
ます」

部員2「大丈夫でしょ」

部員1「うん、簡単だから」

と、ヘラヘラしている。

美沙「見て分かる通り、かなり緩いから。緊
張しないでいいよ」

ひかる「……うん」

美沙「今日はこのまま練習見ていく？」

ひかる「そうしようかな」

突然ドアが開き、立石瑠璃（17）、
入室。

ひかる、瑠璃とぶつかりそうになり、
慌てて避けながら、

ひかる「あっ、すみません……」

瑠璃、無視して通り過ぎる。

美沙「立石さん。この子、今度の公演で照明
やってくれることになったんだけど」

瑠璃、ひかるをじっと見る。

ひかる、思わず目を逸らす。

瑠璃「……へえ」

そのまま黙々とストレッチを始める瑠璃を、冷めた目で見ている部員たち。

美沙、あからさまにため息をつき、ひかるに向かって笑いかける。

美沙「じゃあひかる、見学して行ってね」

ひかる「……うん」

○道（夜）

ひかると美沙、並んで歩いている。

美沙「疲れたねー」

ひかる「お疲れさま」

美沙「どうだった？ 稽古」

ひかる「うーん、セリフ覚えるの大変そう」

美沙「ひかるはとにかくセリフが気になるのね」

ひかる「それしかなくてゴメン」

美沙「気持ちは分かるよ」

ひかる、深刻な表情で、

ひかる「中学の時に、国語の授業でさ」

美沙「うん」

ひかる「平家物語を暗記させられて」

美沙「なんだったっけ。祇園精舎の……ってやつ？」

ひかる「それ」

美沙「懐かしー」

ひかる「全然できなくて、クラスで最後のひとりになって」

美沙「そして切ない」

ひかる「だから、誘われたのが照明でよかった」

美沙「セリフないもんね」

ひかる「みんなが何も見ないでセリフ言ってるの、ほんとに尊敬する」

美沙「そんなに？ でもありがと」

ひかる「演劇部って大会とかあるの？」

美沙「あるよー。コンクール。まあ、うちは出てないんだけど」

ひかる「ふーん」

美沙「緩くやってるからね」

ひかる「…：緩く、か」

美沙「とりあえず、青春みたいなことできた
らさ、それでいいかなって。大会に出たっ
て、どうせ勝てないし。強いところだって、
引退したら終わりでしょ。それこそ平家物
語」

ひかる「どういう意味？」

美沙「いくら盛えたって、必ず終わりがある
ってこと」

ひかる「すごい、美沙天才」

美沙「でしょ。国語得意だから」

ひかる「英語はできないのにね」

美沙「それは自分でも不思議」

ひかる「終わりがあるなら、無理して頑張ら
なくてもいいか」

美沙「…：うん」

ひかる、雰囲気を変えるように、

ひかる「そういえば、途中で入ってきた、キ
レイな子」

美沙「あー、立石瑠璃ね」

ひかる「初めて見たかも。同学年？」

美沙「うん。先月転校してきたらしいよ。最近入部してきたんだけど、あんな感じだから。浮いてるよね」

ひかる「クールな感じだったね」

美沙「良く言えばクール。悪く言えば……冷めてる」

ひかる「ふふ、分かる」

美沙「あっちもイライラしてんだと思うよ。」

みんな、全然やる気ないし」

ひかる「……大変だよ、いろいろ」

美沙「ほんとにね」

○木村家・リビング（夜）

誰もいない室内。

ひかる、キッチンへ向かい、冷蔵庫を開ける。

朝に作ったお弁当の余りのおかずの皿が、そのまま入っている。

○同・里絵の部屋（夜）

里絵、布団で横になっている。

ひかる、ドアの隙間から顔を覗かせて、

ひかる「お母さん、ただいま」

里絵、ごそごそと寝返りをうつ。

里絵「……おかえり」

ひかる「お腹空いてない？ ご飯は？」

里絵「……今はいいや」

ひかる「夜の薬もあるし、ちよつとは食べた

方がいいよ」

里絵「……うん、頑張る」

ひかる「……頑張らなくていいよ。起きれそ

うなら、起きてきて」

里絵「……うん」

○同・リビング（夜）

ひかる、お弁当の余りのおかずを食べている。

テーブルの上には、『さくらメンタルクリニック』の薬袋。

薬袋には里絵の名前。

康一、帰宅。

ひかる、箸を置いて立ち上がり、

ひかる「おかえり」

康一「ただいま」

ひかる「今日は早かったね？」

康一「うん」

ひかる「すぐご飯作るね」

康一「うん」

ひかる、戸棚を開けて中身を覗き、

ひかる「おとうさん、ラーメンでいい？」

と、インスタントラーメンを取り出し

ながら尋ねるが、返事がない。

ひかる、怪訝な表情でリビングへ向かう。
う。

康一、ソファでテレビを見ている。

ひかる「ラーメンでいい？」

康一「うん」

と、テレビに視線を向けたまま答える。

ひかる、小さくため息をつく。

× × ×

シンクに置かれた鍋。

テレビの音だけが行き交う無言の食卓。

ひかる、突然箸を置いて、

ひかる「ねえ、お父さん」

康一「うん？」

ひかる「今日、演劇部の友達に頼まれて、ち

よっとだけ手伝うことになった」

康一「手伝い？」

ひかる「うん。照明係。人が足りないらしく

て」

康一「ふーん」

ひかる「友達、困ってたから」

康一「……いいんじゃないか」

ひかる「お母さんも、最近ちょっと元気だし」

康一「うん」

ひかる「お父さんのご飯までには帰れるよう

にするから」

康一「うん。お父さんはいいけど」

と、ラーメンを啜って、

康一「お母さんのことは頼むぞ」

ひかる、一瞬顔を強張らせ、

ひかる「うん……頑張る」

と、なんとか笑顔を作る。

康一「うん、頑張れ」

ひかる、箸を手に取り、黙々と食べ始める。

点けっぱなしのテレビから、賑やかな番組が流れる。

○山ヶ丘女子高・体育館

体育の授業中。

ひかると美沙、ペアでストレッチ中。

ひかる、前屈する美沙の背中を押している。

美沙「どうだった？」

ひかる「ん？」

美沙「お父さん。と、お母さん」

ひかる「あー、お父さんは、いいんじゃないかって」

美沙「お母さんは？」

ひかる「言っていない」

美沙「……大丈夫？」

ひかる「大丈夫。昨日はちよつと調子悪かつたっぼい」

美沙「まあ、そんな日もあるよね」

ひかる「うん」

美沙「でも、お父さんが賛成してくれたのは良かったじゃん」

ひかる「……うん」

ひかる、心ここにあらずといった様子で、美沙の背中を押し続ける。

美沙「痛たたたた！」

ひかる「あつごめん！」

と、手を離す。

美沙、悶えながら振り返り、

美沙「……よし、交代しよ」

ひかる「え、怖いって」

美沙「ふふ……覚悟しなさいよ」

ひかると美沙、役割交代。

美沙、ひかるの背中を普通の力で押し

ながら、

美沙「あ、そういえば」

ひかる「んー？」

美沙「今日の部活、先に行ってて」

ひかる「え、どうかした？」

美沙、手を止める。

ひかる「（振り向きながら）……なにかあった？」

美沙、ひかるの背中を思いつきり押して、

美沙「……英語の再テスト！ 言わせんな！」

ひかる「痛たたたた！ ちょっと！ 心配し

てあげたのに！」

美沙「くらえっ」

と、背中を押しまくる。

ひかる「痛いってー！ やめてよー！」

ひかると美沙、大はしやぎで笑い合う。

○ 同・部室（夕）

誰もいない部室。

ひかる、入室。

ひかる「あれ、まだ誰も来てないんだ」

ドアが開く音。

ひかる、振り返ると、瑠璃が立っている。
る。

ひかる「あ、こんにちは」

と、小さく会釈。

瑠璃、無視して通り過ぎる。

ひかる「あつ、そっか。クールな人だった」

バツと振り向く瑠璃。

ひかる、ビビりながら、

ひかる「ごめん、心の声が漏れました」

瑠璃「照明」

ひかる「あ、はい。よろしくお願いします」

瑠璃「なんで？」

ひかる「え？」

るり「なんで引き受けたの？」

ひかる「え……」

瑠璃「部員じゃないんでしょ？ 帰宅部？」

舞台照明、やったことあるの？ やりたか

ったの？」

ひかる「ごめんなさい、質問が……多いです」

瑠璃、黙ってひかるを見ている。

ひかる「……部員じゃないよ。帰宅部。やつ

たことないけど、美沙が困ってたから」

瑠璃「ふーん」

ひかる「初心者だから、迷惑かけると思うけ

ど……」

瑠璃、ひかるの言葉を遮るように、

瑠璃「まだ全部答えてないよね？」

ひかる「えっ？」

瑠璃「やりたかったの？」

ひかる、思わず黙り込む。

ひかる「……やりたかったわけじゃないけど、

人が足りないって言われたし、照明なら、

やってもいいかなって……」

瑠璃、鼻で笑う。

ひかる「……笑うところ？」

瑠璃「照明ならっていうか、照明ぐらいなら、

でしょ」

ひかる「え？」

瑠璃「照明ぐらいなら、自分にもできそうだし、やってあげてもいいかなって、そういう感じ？」

ひかる「……そういうわけじゃ」

瑠璃「そういうわけでしょ」

ひかる「なんで立石さんが、そんなこと分かるの」

瑠璃「じゃあ、私の勘違いってことか」

ひかる、思わず俯く。

瑠璃「……照明ぐらいなら、って思ってるの、伝わってるよ。吉田さんも気付いてるんじゃない？」

ひかる「美沙は……」

瑠璃「でも、居ないよりマシだから。人が足りないのは事実だし」

ひかる「私は……ちゃんとやるつもりで」

勢いよくドアが開く音。

美沙、入室。

美沙「ごめん！ 遅くなった！ やばい！
また赤点だ。ぜんっぜんできなかった！
って……なんかあった？」

と、ひかると瑠璃の雰囲気を感じ、
美沙「え、告白？」

瑠璃、部屋を出ていこうとする。

美沙「ちよつと、立石さん、練習は！？」

瑠璃「今日は休む」

と、そのまま去っていく。

美沙「……なんかあった、よね？」

ひかる「ううん、別に。帰っちゃったね」

美沙「帰っちゃったね」

ひかる「自由な人だね、良く言えば」

美沙「悪く言えば、自分勝手」

ひかる「……羨ましいな」

美沙「ちよつとキレイで上手いからって、アレはないよね」

ひかる「上手いの？」

美沙「前の学校でも、演劇部だったらしいよ」

ひかる「ふーん」

美沙「いじめられて、転校して来たんだって」
ひかる「え、そうなの？」

美沙「噂だけど。でも、なんとなく分かるで
しょ」

○木村家・リビング（夜）

相変わらず散らかっている。

里絵、ソファでテレビを見ている。

ひかる、帰宅。

ひかる「ただいま」

里絵「おかえり」

ひかる「今日はお昼食べれた？」

里絵「うん。おいしかった。ひかるの卵焼き」

ひかる「別に普通だよ」

里絵「おいしいよ。お母さんの味とは違う」

ひかる「……夜ご飯作るね。食べるでしょ？」

里絵「うーん、いらないや」

ひかる「……そっか」

里絵「ごめんね」

ひかる「夜の薬あるから。また後で食べてね」

里絵「うん。頑張る」

ひかる「……頑張らなくていいよ」

× × ×

誰もいないソファ。

点けっぱなしのテレビ。

ひかる、独りで食事をとっている。

○同・里絵の部屋（夜）

里絵、布団に入っている。

ひかる、遠慮がちにドアから顔を覗かせて、

ひかる「お母さん、起きてる？」

里絵「……うん」

ひかる、部屋に入り、電気を点ける。

里絵「何かあった？」

と、横になったまま尋ねる。

ひかる、ドアにもたれながら、

ひかる「あのね、お父さんにも言ったんだけど、美沙に頼まれて、演劇部のお手伝い、することになって」

里絵「……美沙ちゃんか」

ひかる「来月が本番だから、時々帰るのが遅くなるかも」

里絵「うん、分かった」

ひかる「ごめんね。なるべく早く帰れるように、頑張るから」

里絵「頑張って」

ひかる「……うん」

里絵「ひかるは本当に頑張り屋さんだね」

ひかる、一瞬俯くも、すぐに顔を上げ、

ひかる「おやすみなさい」

と、無理に笑う。

里絵「おやすみ」

○同・廊下（夜）

ひかる、ドアの前でため息をつく。

○山ヶ丘女子高・教室（夕）

峯田、授業をしている。

チャイムが鳴り、帰り支度を始める生

徒たち。

教室を出ていく峯田。

美沙、ひかるの席に来て、

美沙「ごめんひかる、今日も先行ってて」

ひかる「へニヤニヤして〜なんかあった？」

美沙「（ニヤニヤして）言わせんな」

ひかる「再テスト、いってらっしゃい」

美沙「うん、頑張る！」

ひかる「頑張らなくていいよ」

美沙「え？」

と、首を傾げる。

ひかる、慌てて否定し、

ひかる「あつ、違う、ごめん」

美沙「もー！そこは素直に応援してよ！」

と、ひかるの肩を叩く。

ひかる「うん、頑張れ」

美沙「うい。じゃあ、またあとでね」

ひかる「うん」

美沙、手を振って去っていく。

ひかる、美沙の背中を、ぼんやりと見

つめる。

○同・部室前の廊下（夕）

ひかる、部室のドアを開けようとして、
ふと手が止まり、少しだけ開く。
隙間から中を覗き込むひかる。

瑠璃、一人で発声練習をしている。

ひかる、瑠璃の姿を見つめる。

○同・部室（夕）

ひかる、入室。

瑠璃、発声練習をやめて、

瑠璃「おはよう、照明さん」

と、嫌味っぽく言う。

ひかる「おはよ、主演女優さん」

瑠璃、面食らって、

瑠璃「言い返してきた子、初めてかも」

ひかる、小さく笑う。

ひかる「上手だね」

瑠璃「嫌味が？」

ひかる「違うよ。発声練習」

瑠璃「別に……このぐらい普通」

ひかる「さすが経験者」

瑠璃「え？」

瑠璃、サッと表情を固くする。

ひかる「あ、ごめん、転校生って聞いたから」

瑠璃「いじめられっ子の？」

ひかる「え、いや……そこまでは……」

瑠璃、ひかるをじっと見ている。

ひかる「……ごめん」

瑠璃「いいよ、別に」

と、床に座りストレッチを始める。

ひかる「……多分みんな、立石さんのことま

だよく分かんないから、勝手に噂してるだ

けなんじゃないかな。立石さんのこと、も

っと分かったら、仲良くなれると思う」

瑠璃、ストレッチをやめて、

瑠璃「あなたは分かっているの？」

ひかる「え」

瑠璃「私のこと。そこまで言うなら、分かっ

てるのかなって」

ひかる「……すいません、分かりません」

瑠璃、声を出して笑う。

ひかる「え、笑うところ？」

瑠璃「そりゃ分かんないよね。だって見せてないもん。見せてないものは分からないよ」

ひかる「……ですよね」

瑠璃「テンションが、合わなかったんだって」

ひかる「テンション？」

瑠璃「みんな、とりあえず青春みたいなことができたら、それで良かったんだよね」

と、再びストレッチ。

瑠璃「部活だし。仕事になるわけじゃないから、それが普通」

ひかる「……なんかごめん」

瑠璃「なんで謝るの？」

ひかる「その……とりあえず青春っていうのが……刺さった、かな」

瑠璃「刺すつもりはなかったけど」

ひかる「刺さってごめん」

瑠璃「まあ、新人さんに言っても仕方ないか。
八つ当たりしちゃった、ごめんね」

ひかる「こつちこそ……照明のこと軽く見て、ごめんなさい。悪気はなかったんだけど、悪気がないぶん余計に悪いつていうか……引き受けたからには、ちゃんとやろうって思ってたのは本当だよ。でも、役者じやなくて裏方だし、美沙にも簡単だよって言ってもらえたし、それなら自分にもできるでしょって、正直舐めてる気持ちもちよつとあって……立石さんが、真剣に演劇やりたいって思ってる気持ちを踏みにじって、ごめんなさい」

瑠璃、ひかるの顔をじっと見ている。

ひかる「え、私なんか変なこと言った？」

瑠璃「長ゼリフだね」

ひかる「え」

瑠璃「そんな長い台詞、よく言えたね」

ひかる「……本当だ。平家物語も言えるかな」

瑠璃「何それ？」

ひかる「いや、こっちの話」

瑠璃「ふーん」

ひかる、背筋を伸ばして、

ひかる「照明、やらせてください。とりあえずじゃなくて、ちゃんと青春してみたい」

瑠璃「……うん」

突然、教室に飛び込んでくる美沙。

美沙「ひかるっ！」

と、息を切らしている。

ひかる「美沙、どうしたの？」

美沙「先生が探してたの！ 病院から電話があつたって。お父さんが、倒れたって！」

○山ヶ丘市民病院・救急外来・待合室（夜）

里絵、ソファで泣いている里絵。

里絵の背中をさすっているひかる。

ひかる「大丈夫だよ。お父さんが死ぬわけないじゃん」

里絵「でも、でも……」

ひかる「大丈夫だから。ほら、あんまり泣い

てたら、お父さん、心配するよ」

中野敦子（38）、処置室から出てきて、ひかると里絵の前へ。

敦子「木村さんのご家族ですか？」

ひかる「はい」

敦子「処置が終わりました。先生から説明がありますので、奥様、中どうぞ」

里絵、泣き続けている。

ひかる「あの、母は精神的にちよつと難しいと思うので、私が代わりに聞いても大丈夫ですか？」

敦子、一瞬面食らうも、

敦子「分かりました。ではお二人で聞いてください」

ひかる「はい、すみません」

敦子「こちらへどうぞ」

ひかる「お母さん、立てる？」

ひかる、里絵を支えながら歩く。

敦子、ひかる、里絵が処置室へ入っていき、自動ドアが閉まる。

○山ヶ丘女子高・教室（朝）

生徒たちの話し声で賑やかな教室。

ひかる、着席。

美沙、ひかるの元に寄ってくる。

ひかる「おはよ」

美沙「お父さん、大丈夫だった？」

ひかる「脳梗塞、だって」

美沙「えっ」

ひかる「会社で倒れたおかげで、すぐ病院に行けたから、命は助かったって」

美沙「良かったあ……」

ひかる「でも、後遺症が残るみたいで」

美沙「後遺症？」

ひかる「麻痺とか、障害？ リハビリは、してくれるみたいだけど」

美沙「良くなるんだ。良かった」

安心した様子の美沙。

浮かない顔のひかる。

ひかる「……うん」

美沙「お母さんは、大丈夫？」

ひかる「うーん……だいぶ落ちてる」

美沙「……だよね」

ひかる「だからさ、あの、部活のことなんだけど」

美沙「あ、いいよ全然！ 気にしないで」

ひかる「ごめんね」

美沙「ぜんっぜん大丈夫。ひかるは、お父さんとお母さんのこと、頑張ってる」

ひかる「……うん」

○山ヶ丘市民病院・個室病室

モニターや点滴に囲まれ、ベッドで眠っている康一。

○木村家・里絵の部屋

布団にくるまり、横になっている里絵。

○山ヶ丘女子高・教室

峯田、授業をしている。
ひかる、ぼんやりと外を見ている。

ひかる M 「父親が脳梗塞で、母親がうつ病。

そんな子どもは、日本にどのぐらい居るんだろう」

ひかる、美沙の背中を見る。

美沙、振り向かない。

ひかる M 「人生で一度しかない高校生活が、

親の看病で終わる子どもは、どのぐらい？」

峯田 「おい木村、ボーツとすんな」

ひかる、姿勢を正して、

ひかる 「……すみません」

授業を再開する峯田。

ひかる、再び外を眺め、

ひかる M 「100人ぐらい、居たらいいのに

な……」

○木村家・リビング（夜）

里絵、ぼんやりとソファに座っている。

ひかる、黙々と洗濯物を畳んでいる。

ひかる 「ねえお母さん、今度、お父さんのお

見舞い、一緒に行こうよ」

里絵、返事をしない。

ひかる「……お父さん、リハビリ進んでないみたいで。お母さんに会えたら、ちよつとは気合い入ると思うよ」

里絵、真っ暗なテレビ画面を見ている。

ひかる「お母さん、この前言ってた、演劇部の話、断ったから」

里絵、ゆっくりとひかるの顔を見る。

ひかる「夜ご飯、冷蔵庫に入れてるから。お腹空いたら食べて、夜の菓飲んでね。私、宿題してるから」

ひかる、洗濯物を持って足早に部屋を出る。

○同・ひかるの部屋（夜）

綺麗に整頓された部屋。

ひかる、勉強机に着席し、カバンから宿題を取り出そうとするが、

ひかる「あれ？」

と、何度か探して、ため息をつく。

ひかる「最悪……」

○同・リビング（夜）

里絵、ソファに横になっている。

ひかる、ドアから顔を覗かせ、

ひかる「お母さん、学校に宿題忘れちゃったから、取りに行ってくる」

里絵「そう……頑張ってね」

ひかる「……行ってきます」

○山ヶ丘女子高・全景（夜）

真っ暗な校舎。

○同・教室（夜）

ひかる、引き出しから宿題を回収し、
大きなため息をついて、ぼんやりと外
を見る。

真っ暗な校舎。

一つだけ、明かりのついている教室。

○同・部室（夜）

瑠璃、一人で台本を読んでいる。

ひかる、入室。

瑠璃、顔を上げて、

瑠璃「……びっくりした」

ひかる「それはこっちのセリフ。まだ帰らないの？」

瑠璃「何しにきたの？」

ひかる「宿題、忘れちゃって」

瑠璃「違うよ」

ひかる「え？」

瑠璃「ここに、何しにきたのって話」

ひかる「別に……電気がついてたの、見えたから」

瑠璃「辞めたんじゃないの？」

ひかる「辞めたよ」

瑠璃「青春、やっぱり要らなかった？」

ひかる「……家族が病気だから、仕方ないよ」

瑠璃、鼻で笑う。

ひかる「おかしい？」

瑠璃「おかしくないよ。言い訳だなんて思っただけ」

ひかる、表情を強張らせて、

ひかる「何にも知らない人に、言われたくないよ」

瑠璃「何にも知らないよ。だって何にも見せてないでしょ。見せてないものは分からない。吉田さんにも、何も言っていないんですよ」

ひかる、何も言えず俯く。

瑠璃「いい子ぶってるんだよ」

ひかる「……やめてよ」

瑠璃「周りにも、自分にもいい子ぶってる。それって何の意味があるの？ 私から見たら、あんたは照明を見下して、反省して、青春しようとして、途中でやめた。それだけの人」

ひかる「そっちだって、いじめられて転校してきたくせに。今だって浮いてるし、嫌われてる、それだけの人だよ！ みんな、頑

張りたくないんだよ！ 頑張ったって、余計に疲れるだけじゃん。頑張るから壊れるんでしょ。だったら、頑張らなくていいじゃん。頑張らずに、そこそこ楽しく生きていけたら、それでいいじゃん！」

と、息を切らして言い切る。

黙って聞いていた瑠璃、部屋を出て行くとする。

ひかる「待ってよ」

瑠璃、振り返って、

瑠璃「頑張らなくていいよ」

ひかる「え……」

瑠璃「頑張らたくない人は、頑張らなくていいと思う」

と、小さく微笑む。

瑠璃「でも、私は無理」

ひかる「……なんで」

瑠璃「そんなの……分かんないよ」

瑠璃、部屋を出ていく。

取り残され、立ち尽くすひかる。

○木村家・リビング（夜）

点けっぱなしのテレビから、笑い声が響いている。

ひかる、台所で洗い物をしている。

ひかるの頬に涙が流れ、次第に泣き声が大きくなり、しゃくりあげて泣き始める。

○山ヶ丘市民病院・個室病室

康一、ベッド上で体を起こしている。

ひかる、パイプ椅子に座っている。

ひかる「お父さん、リハビリどう？」

康一「うん」

ひかる「お母さんも寂しがってるから。早く退院しようね」

康一「うん」

ドアがノックされる音。

ひかる「はい」

担当医の三隅修二（43）、入室。

三隅「木村さーん、回診です」

ひかる、立ち上がってお辞儀。

ひかる「父がお世話になってます」

三隅「あれ、娘さん？」

ひかる「はい」

三隅「木村さん、こんなに可愛い娘さんがいたんですねー」

康一「うん」

三隅「じゃあ、診察させてくださいね」

康一「うん」

○山ヶ丘女子高・屋上

誰もいない校舎。

瑠璃、屋上から景色を眺めている。

頬に涙が静かにこぼれ、すぐに拭う。

○山ヶ丘市民病院・個室病室

三隅、康一の目をペンライトで照らし
ている。

三隅「はい、いいですよ」

康一「うん」

ひかる「大丈夫そうですか？」

三隅「対光反射もしつかりあるし、大丈夫」

ひかる「良かったね、お父さん」

康一「うん」

三隅「うん、しか言わないのが気になるけど」

ひかる「口癖なんです。父の」

三隅「ああ、そうなんだ。じゃあ、木村さん、

次は、今から僕が言う言葉を繰り返してく

ださいね」

康一「うん」

三隅「いきますよ、瑠璃も玻璃も、照らせば

光る」

ひかる「えっ」

三隅「はいどうぞ」

康一、黙っている。

三隅、苦笑いで、

三隅「ちよつと難しかったですね。また今度
にしましょうか」

康一「うん」

ひかる「なんですか？ それ」

三隅「ん？」

ひかる「るりも、はりも、ってやつ」

三隅「あー、これはね、患者さんの言葉の麻痺を調べるときに使う方法なんだよ」

ひかる「ふーん」

三隅「麻痺があると、ラ行を言うのが難しくなるからね。らりるれろ、って」

ひかる「ふーん……らりるれろ」

三隅「マイナーな諺だから、そもそも患者さんに伝わりづらいんだよねー」

ひかる「どういう意味なんですか？」

三隅「瑠璃と玻璃は、どっちも宝石のこと。宝石は、たとえ石の中に混じっていても光を照らせば輝くから、才能のある人はどこにいても目立って、そういう意味」

ひかる「へえ……」

三隅「目立つのも楽じゃないだろうけどね」

ひかる「凡人には、関係ない話でした」

三隅「……なかなかドライだね、今どきの子は」

ひかる「すいません」

三隅「いやいや、謝ることじゃないよ」

ひかる「だって裏返したら、才能のない人は、

どこでも目立ってないってことですもんね」

三隅「うーん、でもね、別のところを裏返せば、こうとも取れるでしょ」

ひかる「え？」

三隅「どんなに輝かしい宝石でも、暗闇じゃただの石ころと変わらない。光に照らされていないと、輝けないんだよ」

康一「うん」

ひかると三隅、驚いて康一を見る。

キョトンとしている康一。

三隅「ほら、お父さんも言ってる」

ひかる、微笑んで、

ひかる「……うん」

と、康一に向かって頷く。

○同・廊下

ひかる、廊下を歩いている。

敦子「ひかるちゃん」

ひかる、振り向き、敦子の顔をしばらく見つめ、

ひかる「あ、この前は、ありがとうございますました」

と、お辞儀をする。

敦子「ううん。ひかるちゃん、今、少し時間ある？」

ひかる「え、はい……」

○同・中庭

ひかると敦子、ベンチに座っている。

敦子「ごめんね、忙しいのに」

ひかる「いえ」

敦子「お母さんは、大丈夫？」

ひかる「まあ、なんとか」

敦子「じゃあ、ひかるちゃんは、大丈夫？」

ひかる「え？ 私は別に、元気です」

敦子「無理してない？」

ひかる「……家族だから、助け合うのは当た

り前なので、大丈夫です」

敦子「そっか。家族だもんね」

ひかる「はい」

敦子、中庭を眺める。

他患者とその家族たちがくつろいでいる。

敦子「ひかるちゃん、ヤングケアラーって言葉、聞いたことある？」

ひかる「えっと……分かんないです。ヤング……なんですか？」

敦子「ヤングケアラー。ひかるちゃんみたいにね、ケアが必要な家族のお世話をしている、子どもたちのこと」

ひかる、首をかしげながら、

ひかる「私は、お世話っていうか、お母さんの代わりに家事をしてるだけです」

敦子「うん」

ひかる「お父さんのことは、看護師さんがしてくれてるし」

敦子「そうだよね。でもね、お世話って、介

護をしてるっていう意味だけじゃなくて。

ひかるちゃんみたいに家事をしたり、気持ち
を励ましたり、支えたりすることも入る
の」

ひかる「よく分かんないです。家族を助ける
のって、悪いことなんですか？」

敦子「ううん。全然悪いことじゃない」

ひかる「じゃあ何で……」

敦子「これだけ、どうしても言いたくて」

ひかる「なんですか？」

敦子「頑張る気持ちは、そのまま大丈夫。

でもね、ひかるちゃんがやりたいことがあ
るなら、我慢しないでやってもいいの。そ
のために、私たちが手を貸してもいいか
な？」

○バス車内（夕）

まばらに乗客が座っている車内。

着席していたひかる、スマホを取り出
す。

『ヤングケアラー』と検索すると、い

くつもの記事やサイトが出てくる。

ひかる、窓の外を眺め、

ひかる「瑠璃も玻璃も、照らせば光る……」

と、小声でひとりごと。

○木村家・リビング（夜）

里絵、ゆっくり洗濯物を畳んでいる。

ひかる、入ってくる。

ひかる「ただいま」

里絵「おかえり」

ひかる「ごめん、遅くなった」

里絵「いいよ、大丈夫」

ひかる「洗濯物、私があとでやるのに」

里絵「ううん、大丈夫」

ひかる「……頑張ってるね」

里絵「お父さんも、頑張ってるから」

ひかる、里絵の隣に座り、てきぱきと

洗濯物を畳んでいく。

ひかる「ねえ、お母さん」

里絵「うん？」

ひかる「私、やっぱりやりたい」

里絵「部活？」

ひかる「うん。お父さんも、お母さんのこと
も気になるけど、やりたい」

里絵「……うん、いいと思う」

ひかる「家のことは、ちゃんとするから」

里絵「ううん……お母さんも、頑張る」

ひかる「うん。一緒に頑張ろう」

ひかると里絵、微笑み合う。

○山ヶ丘女子高・部室（夕）

ひかる、入室。

駄弁っている部員たち。

部員1「あ、木村さん。戻ってきてくれたん
だ」

ひかる「うん、ごめんね。心配かけて」

部員2「またよろしくねー」

ひかる「……立石さんは？」

部員2「そういえばまだ来てないね。いつも

早いのに」

部員1「無駄にね」

と、笑い合う部員たち。

ひかる、返事をせず部室を出て行く。

○同・廊下（夕）

ひかる、廊下を歩いている。

美沙、向かいからやって来て、

美沙「どこ行くの？ もう練習始まるよ」

ひかる「ちよっと、屋上にね」

美沙「屋上？」

ひかる「主演女優さんを、迎えに行こうかな
って」

美沙、しばらく考えたあと、ニヤツと

笑って、

美沙「じゃあ私は、みんなのお尻を叩いてこ

ようかなー」

ひかる「うん、よろしく。強めにね」

美沙「了解」

美沙、改まって、

美沙「ひかる、ありがとね」

ひかる「え、なに、急に」

美沙「ひかるのこと見てたらさ、どうせ勝てないからって、高望みしないようにしてた自分が恥ずかしくなった」

ひかる「……うん」

美沙「コンクール目指して、頑張る」

ひかる「うん。一緒に頑張ろ」

○同・屋上（夕）

瑠璃、屋上の柵にもたれ、校庭を眺めている。

ひかる「あ、やっぱり居た」

瑠璃、ちらりと振り向くも、再び校庭へと視線を戻す。

ひかる、瑠璃の隣に立ち、一緒に校庭を眺める。

校庭では運動部が練習中。

瑠璃、校庭に目を向けたまま、

瑠璃「元照明さん、どうしたの」

ひかる「元じゃないよ」

瑠璃「……ふーん」

ひかる「練習、始まってるよ」

瑠璃、答えない。

ひかる「あのさ、前に、頑張らなくていいよ、
って言ってくれたでしょ」

瑠璃「……言ったっけ」

ひかる「私ずっと、お母さんに、頑張らなくていいよって言ってた。でも本当は、自分がそう言われたかったの」

ひかる、背中を柵に預け、

ひかる「頑張らなくていいよって。ずっと言われたかったはずなのに、全然嬉しくなくてびっくりした」

瑠璃「せっかく言ったのに」

ひかる「私は、一緒に頑張ろうって、言いたかったし、言われたかったんだと思う」

瑠璃「……うん」

ひかる「だから、一緒に頑張ろうよ」

瑠璃「あのサボり魔たちと？」

ひかる「いいじゃん。私たちが頑張ってたら
さ、みんな着いてくるよ。だって、青春し
たくて演劇やってるんでしょ」

瑠璃「大変だよ、頑張ると」

ひかる「……うん」

瑠璃「才能ないかもってイライラするし、自
分より上手い人なんていくらでもいるし」

ひかる「うん」

瑠璃「こんなことやってて意味あるのかなっ
て、何度も思うし」

ひかる「うん、それはその時考える」

瑠璃「……どうしたの急に」

ひかる「なにが？」

瑠璃「別人じゃん」

ひかる「あなたも別人だよ。どうしちゃった
の、瑠璃」

瑠璃「……私の名前、知ってたんだ」

ひかる「うん。瑠璃は？」

瑠璃「……ごめん、知らない」

ひかる「ひかる」

瑠璃「ひかる？」

ひかる「そう。いいコンビだよ、私たち」

瑠璃「意味分かんない。勝手に結成するな」

ひかる「いい演技のためには、国語の勉強も

大事だよ、主演女優さん」

瑠璃「……さっきから何言ってるの？」

ひかる「ねえ、瑠璃」

瑠璃「なに、ニヤニヤして」

ひかる「この諺、知ってる？」

○市民ホール・外観（数ヶ月後）

『第38回・高校生演劇コンクール』
の看板。

○同・ホール内（数ヶ月後）

薄暗いステージ。

観客と審査員たち、舞台を観ている。

客席には、里絵と康一の姿。

瑠璃にスポットライトが当たる。

瑠璃、鮮やかな衣装を身につけて、ス

テーブルの真ん中に、まっすぐと立っている。

○同・調光室（数ヶ月後）

ひかる、調光卓の前に座っている。

指示がびっしりと書き込まれた台本を片手に、照明作業中。

台本の表紙に、手書きで書かれた文字。

『瑠璃も玻璃も照らせば光る』

〈了〉